

な か ま

発行
佐倉市立中央公民館
編集
なかま編集委員会
〒285-0025
佐倉市鏑木町 198-3
電話 (043) 485-1801

ゴールデンウィーク ----- 神林 俊子
私のふる里 ----- 荒 悟
都心のオアシス ----- 鴫崎 金次
新しい歯磨き法始めませんか？ 島崎 香

日光東照宮へのオランダからの贈り物 「回転燈籠」「釣燈籠」

小池 由美

日光東照宮を訪れた。徳川家康の菩提を弔う為に諸大名が献納した燈籠を見学するた
めである。
陽明門の絢爛豪華さに目が向き、今までは燈籠を見たことがなかった。表門から続く100基を越す石の燈籠の数に驚いた。堀田正盛の献納燈籠が階段近くに左右一対あった。

燈籠を調べている中、目について離れなかったのはオランダより贈られた屋根付きの真鍮で出来た「回転燈籠」と「釣燈籠」である。
陽明門を目指して見学するので、あまり目立たない位置に置かれているが、「回転燈籠」の大きさは高さ3位、重さは2位、贈られた当初はキラキラ輝き、中で灯される光の数々は、陽明門のあたり一面を照らし不思議な異色の物体に感じられたと思う。優雅

さと匠の技が冴え、緑青色の落ち着いた趣きである。
「回転燈籠」は1643年アムステルダムより長崎経由で陸路江戸まで運ばれた。大変な日数を要したと推測される。
鎖国時代にオランダとの貿易を許した朱印状が発給されたのは1609年である。
自国はもとよりヨーロッパの国々の医学、化学、産物、兵器などを日本に紹介した。日本からの輸出は当初、銀(1668年以降禁止)、金(1763年以降禁止)、その後、陶器、銅、漆器、工芸加工品等が加わった。日本にあって、オランダとの貿易は世界を知る窓だった。オランダを旅した時、シーボルトが書かせた植物絵図を見て繊細な図で驚いた。

独占貿易のお礼として、商館長が江戸に出向き、献上品と將軍への拝礼が年1度、後に4年に1度、218年の間に160回以上も行われた。謁見の献上品は望遠鏡、大砲、地球儀、西洋医学の道具や薬、科学の書物、海洋術、地図、蒸気船、シマウマ、ラクダ等である。

東照宮に飾られた最初の献上品は1636年の「釣燈籠」、次はブラケット型燈架12台、スタンド型蓮燈籠1台、將軍家光への献上品「回転燈籠」は、寛永13年の家光親拝の銘が「回転燈籠」に刻まれている。その模刻制作品は4年近くもかかって作られ、ハウステンボスに飾られている。
佐倉では佐倉日蘭協会発足から25周年を迎え、オランダとの交流がますます盛んになり、オランダ料理を教えるも近い、私にとってもオランダが近くて親しい国になった。江戸時代の蘭学と日本の医学の進歩が、ここ佐倉にも大きな影響を与えた事と思う。

(編集委員)

ゴールデンウイーク

連休に孫と一緒に過ごした公園での事、遊具にあきて二人でベンチに座った。ちょうどその前に砂場があり三人の兄弟が楽しそうに、大きな穴を掘りトンネル作りに夢中だった。兄は小五、姉は小三くらい、一番下の女の子は三才と私に言っていた。その穴に自分達でつれてきた犬を入れてみては大笑いしていた。私達もその様子がおかしく一緒に楽しんでいたのだが、そのうち兄が三才の妹にも「入れ」といいその子も「いよ」と言って穴に入った。すると兄はそのトンネルの砂を崩し始めどんどん埋め始めた。顔に砂がかかる毎に「ごめんごめん」とやさしく言っている。彼女も笑っていた。もう一人の妹と大量の砂を首から下まで二人でポンポンと叩きながら何とも楽しい三人の様子に私と孫も笑っていた。

した。暫らくして「出ていよ！」と兄がいいながら両手を出してひっぱりましたが、「痛いよ！」と泣き始めました。二人は急いで砂を払いひっぱりますが泣声は大きくなるばかり、私も急いで砂をとりますが、湿った砂は硬く下半身をとらえている様で脇の下からひいてみても駄目でした。恐怖で声はひびき渡り私も動転していました。膝がみえても駄目で足首まで手が届いてやっと抜ける事ができましたが、気の狂った様な泣きじやくりが続いて向こうをみると兄が知らせに行ったらしく大きなシャベルを持った人達が走ってきました。何とか怪我はせず家に帰った様でしたが何とも後味の悪い、事故はこうしておきるのかな！と孫との怖い体験をした一日でした。

(稲荷台 神林 俊子)

都心のオアシス

小径を分け入ると、そこに別世界が広がっていた。曲がりくねった小径が交叉して続

く。足元にノカンゾウの橙赤色がほのかに見える。薄暗い空間が広がる。花穂がトラの尾の様なオカトラノオが風に揺れている。見上げると、コソツとコゲラの枝を叩く音が雑木林一帯に鳴り響いている。空の色は青く輝いている

が、足元には、まだらな光が残っている。はるか彼方に光るハナシヨウブが色を付け始めた。遠くから雅楽の音色が微かに聞こえてくる。小径のまん中に立ち止まり、五感を研ぎ澄ませる自分が、ここにいた。ここは、皇居東御苑の二の丸雑木林の或る朝の情景である。

私は週の三回程度この小径を歩いて平川門の近くの会社に勤務している。佐倉から電車を乗り継いで、ここまで来

る主因は、小径に一人佇み、この別世界をひとり占め出来るからだ。ここ二の丸雑木林の由来が現地の案内板にこう書かれている。

「この雑木林は、昭和天皇のご発意により、武蔵野の面影を持つ樹林として、昭和五七年から六〇年にかけて整備されたものです。樹木や野草を始め、鳥や昆虫等も楽しめる、自然の林として大切に育てております。」

私は、この情景をアイパットで撮影して、その場からリアルタイムで、カレッジの同級生や知人に発信している。みんな居ながらにして、自然の情景が送られてくると喜んでいただいている。当分、会社勤務は止められないと、密かに思っている。この感動があるうちは。

(宮前 鴫崎 金次)

私のふる里

私のふる里は天草です。天草諸島は熊本県の西部に位置し北は有明海、東・南東は八代海（不知火海とも言う）、西・南西は東シナ海に囲まれた島々21島（無人島含む）よりなる。全島の総面積は約1000平方キロメートルで沖繩本島に及ばない。メインの島は天草下島、天草上島、大矢野島の3島で、全面積の約80パーセントを占める。1番大きい島が下島で574平方キロメートル（淡路島とほぼ同じ）。2市1町の人口は12万3千人である。

昭和41年、熊本県の宇土半島の先端三角と大矢野島、松島、上島に至るルートをつの橋（天草五橋・天草パールライン）が開通しやつと九州本土と繋がった。有明海の対岸島原半島の雲仙との「雲仙・天草国立公園」で海水浴、イルカウォッチング、船旅、

温泉等が楽しめ、年間480万人の観光客。特に夏は海水浴で車の通行量が1日2万5千台にも達し混雑する。

産業は車えび、真珠の養殖が盛んである。又優れた陶石の産地で天草陶石として全国に出荷し、全国陶器原料の8割を占める。農業は柑橘栽培が主で、天草デコポンは有名である。

しかしながら地域性も加わり過疎化、少子高齢化は加速し、10年で2万3千人減とのことである。

このような天草が私のふる里。私は天草が大好きだ。風光明媚、波静か、人情満載、純真、そんな天草が私にとっては心和む癒しのふる里である。熊本空港から3時間、車窓からまっ青な海や島々をのんびり観ていると、「帰って来たぞー」の気分が高揚する。方言丸出しで大好きな天草滞在のスタートです。

（南臼井台 荒 悟）

新しい歯磨き法 始めませんか？

毎日一生懸命歯を磨いているにもかかわらず、なぜかむし歯や歯周病で苦労している方はいませんか？ お口の中の状態や歯並びは一人一人違いますが、磨きにくいところ、歯ブラシの届きにくいところがあります。また、人によって磨き方の癖があつて磨いている様でも抜かしていたり、歯ブラシが歯の面に当たっていないか？と、どうしても磨き残しているところが出てきてしまうのです。

歯磨きは身だしなみ・エチケットでもありますが、歯と歯肉をむし歯菌や歯周病菌から守るむし歯・歯周病予防なのです。歯周病の主な原因は磨き残した歯垢です。歯垢は水には溶けず、うがいでは取り除く事ができません。歯ブラシでこすり落とさなければきれいになりませんので、磨き残しを無くす事が第一です。

磨き残しを防ぐ為には、磨く場所の順番を決めて一巡する様に磨きます。歯ブラシでお口の中を一筆書きの要領で一周しながら全ての歯を磨きます。そして、その時重要なのは、手鏡を使ってお口の中と歯ブラシの当たっている場所を確認する事です。歯肉の色は薄いピンク色ではなく、赤くなつていませんか？ 歯と歯の間の歯肉の形が三角形ではなく、丸く厚みを持つていませんか？ そして、歯肉から出血していませんか？ このような場所があれば、そこを磨く時間は長めにとつて、お口の中をもう一周磨きましよう。

キレイな笑顔の為に、おいしく物を食べるために、新しい歯磨き習慣を取り入れてみてはいかがでしょうか。歯科衛生士歴10年目のまだまだベテランとは言い難い私からの提案です。

（王子台 島崎 香）

10月の黒板

『なかま』の原稿を募集しています！

『なかま』の2ページと3ページは佐倉市民の皆さんから投稿いた

だいた記事を掲載しております。

『なかま』の原稿は、自由テーマを原則としています。「出会いと別れ」、「旅の思い出」、「祭り」、「私のふるさと」、「私の健康法」など何でも構いません。また、日常での出来事で発見したこと、気付いたこと、経験や感想などもご随意にお書きください。

原稿の字数は、650字（13字×50行）以内です。また、掲載するにあたり常用漢字への変更や、句読点等の修正をさせていただきます。

問い合わせ先

佐倉市立中央公民館 TEL043-485-1801

〒285-0025 佐倉市鐺木町198-3

URL http://www.city.sakura.lg.jp/soshiki/16-1-0-0-0_1.html

さくら道

江戸時代、日本橋を基点として各地に街道が整備されていきますが、その一つが佐倉に至る佐倉道です。

日本橋から千住、新宿をまわり南下して小岩市川の関所に至る道が、江戸のなかでの佐倉道のルートとされていますが、新宿までは正しくは水戸佐倉道。それに新宿は常磐線の綾瀬の近く何故、遠回りするのかという疑問がわいてきます。

これには幕府制定の公道が関係しています。日本橋を出てから両国橋を渡り東西に流れる堅川に沿って東に進み、

さらに中川を渡り小松川から小岩に出る道が元禄中頃に公道から外され元佐倉道といわれるようになったようですが、これだと遠回りせずほぼ真つすぐ来られます。

公道でなくなっても道がなくなつたわけではありません。本来の佐倉道は元佐倉道ということになります。

（金井 義彰）

あとがき

今年の5月に新しく編集委員となった。編集といえば私にとつてその昔テレビドラマのお話、大学のマスコミ論の講義内容であつたように思う。

編集長と記者との掲載にあつたの応酬。また編集者と経営者の発行権、営業部の営業面からの横やりなどの確執。言論の自由、表現の自由を守り、出版、報道することの難しさが面白おかしく描か

れていたようだ。

『なかま』は月一回、発行部数も1500部程のミニコミ紙である。さきの巨大化し権力化したマスコミとは一線を画す。

過去『なかま』は高齢者のための情報誌。今は佐倉市民の心の交流の場へと変わった。ここの編集委員とは身の引き締まる思いだ。

（西崎 正夫）